

余姚王学関係遺跡探訪記（附 河姆渡遺跡・天一閣・延慶寺跡）

永富青地

八月二十六日八時二十分、楠山春樹本学名誉教授を中心とする浙江省思想宗教史跡調査団Bコースの九名はマイクロバスで寧波東港大酒店を出発し、余姚へと向かった。寧波から余姚までの五十キロ程の道のりは川沿いの直線路であり、過去、この附近の都市が水路で結ばれていたことを実感させられた。王守仁（陽明）は晩年の住まいであった紹興と余姚を気軽に往復していたことが記録から窺われるが、陸路の整備が充分とは言えない当時、水路の重要性はより高かったことは容易に想像できる。

一、中天閣

程なくして余姚の市街地にある龍泉山に到着した。龍泉山は余姚市政府のすぐ西に位置しており、まさしく市の中心である（なお、市政府は清代の県署の跡地に位置しており、中国の地方行政の連続性を考えさせられる）。龍泉山は僅か六十七メートルの山と言うより丘であるが、平坦な余姚にあってはかなり高く見える。旧名を靈緒山、また嶼山ともいうこの山は現在山全体が龍山公園として整備されている。その公園の入り口で我々は余姚市文物管理委員会の葉樹望氏に御会いすることができた。葉氏は特に余姚に於ける王守仁の遺跡について研究されており、論文としては「王陽明史跡考述」（邵九華氏との共著）、「王陽明の後学 錢德洪について」（丸山浩明訳、『陽明学』第五号、二松学舎大学陽明学研究所、一九九三）等、著作としては『余姚郷情』（共著、黄山書社、一九九五）等を執筆されている。葉氏の案内で我々は山の中腹にある王守仁の講学の地として名高い中天閣へと向かった（位置については図一を参照）。中天閣の名の由来は唐方干の「中天氣爽星河近」に由るものだと言う。たかが六十米程の山で「中

天」は大袈裟なようだが、登るのには案外骨が折れ、この句を実感させられた。中天閣は本来、この山のほぼ全体を占めていた龍泉寺の建物だったものであるが（龍泉寺は現在は龍泉山の南の麓に移されている）、龍泉寺と王家とは王守仁の父、王華が龍泉寺で勉強していた時以来の縁があった。王華の龍泉寺に於ける勉強ぶりについては「海日先生行状」（『王文成公全書』〔以下、『全書』と略〕巻三十七）に、十四歳の時の事として、怪談をした後、僧侶がお化けの振りをして来ても平然と讀書していたというエピソードが語られている。なおこのエピソードは『皇明大儒王陽明先生出身靖乱録』（『三教偶拈』所收、『馮夢龍全集』三十卷、上海古籍出版社、以下『出身靖乱録』と略）では豚の膀胱を膨らませて鬼の頭にして脅しに来たところ、小刀で切りつけ、それを破裂させたことになっている。『出身靖乱録』の脚色が甚だしいことには定評が有るが、これはその一例である。また王守仁もこの寺を愛し、「我愛龍泉寺、寺僧頗疎野」（「憶龍泉寺」、京師詩八首之一、『全書』巻十九）の句を残している。現在の中天閣は四方を白い壁に囲まれており、面積二十二・五平米、奥行き十三・二四米、高さ八・三米の建物の保存状態は非常に良好であった。内部には王守仁の一生に関する展示がなされており、余姚での彼の弟子の一覧も掲げられていたが、早世した徐愛を除くと、やはり錢徳洪の存在が際立つ。事実、錢徳洪は『全書』附録の「年譜」に記録の残る二回の中天閣での講学のいずれにも参加している。一回目は正徳十六年（一五二一）九月、掃省した王守仁のもとに友人と共に面会を願い出た時であり（「年譜二」、『全書』巻三十三）、二回目は嘉靖四年（一五二五）九月、やはり王守仁が掃省したおりである（「年譜三」、『全書』巻三十四）。この時に王守仁が記したのが有名な「書中天閣勉諸生」（『全書』巻八）であるが、この時錢徳洪は既に王畿と並ぶ最有力の弟子であった（なお一回目の講学の場所を「年譜」は明記しないが、王畿「刑部陝西司員外郎特詔進階朝列大夫致仕楮山錢君行状」（『龍溪王先生全集』巻二十）は「龍泉中天閣」と明記している）。現在展示はされていないが、ここには王守仁の真筆とされる文書が一点保存されている。「客座私祝」と題するものであり（『全書』巻二十四に収められているものは同名だが内容は全く異なる）、『王陽明全集』（上海古籍出版社、一九九二）一二二一頁に収められている。但し、そこで「上大人書二」としてあるのはおそらく整理の為の仮題であり、実物に記された題は前述の如く「客座私祝」である。

中天閣にはその外にも古籍二十一万余冊、文物三千六百余件が保存されている（『浙江省名鎮志』、浙江省名鎮志編纂委員会、上海書店、一九九一に由る）。文献館としての名称は梨洲文献館であり、中天閣は地図上では多く梨洲文献館として記されているため注意が必要である。

王守仁没後の中天閣について光緒丁酉（二十三年、一八九七）の『重修余姚県志』（中国地方志集成、浙江府県志輯三十六所收、上海書店、一九九三）によって簡単に述べると、嘉靖十三年（一五三四）に陽明先生祠となり、翌年に徐愛・錢德洪も配享されている。順治八年（一六五一）に補修されたが、咸豐年間（一八五一～一八六一）の末には焼失し、同治年間（一八六二～一八七四）の初めに龍山書院が費用を負担して再建させたという（葉樹望氏は前記の「王陽明史跡考述」に於いて、その後同治十一年（一八七二）に再び焼失し、光緒五年（一八七九）に再建されたとしている）。

余姚出身の歴史上の人物としては王守仁のほかには嚴光、朱之瑜、黃宗羲が有名で、これら四人を記念した四先賢故里碑亭が龍泉山の南の麓に有るのも見ることができた。これらは清代になってからのもので、中華民国になってから今の場所に移されたという。

二、瑞雲樓

龍泉山から下山後、葉氏の案内で王守仁の生誕の地である瑞雲樓へと向かった。瑞雲樓の名の由来については「年譜一」（『全書』卷三十二）に、王守仁の母の妊娠中に祖母が、神人が雲に乗って子を授けに來た夢を見、そのことを伝え聞いた地元の人々が王守仁の生まれた家を指して瑞雲樓と言ったというエピソードを記し、『出身靖乱録』もそれをほとんどそのまま使用している。前記『重修余姚県志』の瑞雲樓の項の注には錢德洪の文を引用しているが、そこには瑞雲樓についてのより詳細な記述が見られる。それに由ると、この建物は莫氏の所有であったのを守仁の父王華が科挙合格以前に借りていたもので、守仁が貴顕の人となった後、人々は瑞雲樓と呼ぶ様になったという。葉樹望氏は前記の「王陽明史跡考述」に於いてこの記述から、瑞雲樓の呼称は守仁が進士出身に挙げられた弘治十二年（一四九九）以降のものとする。当時の科挙合格者が有していた巨大な

声望を考えると、恐らくこちらの説がより事実に近いと言えよう。錢徳洪はこの話に続けて、彼の父錢蒙も莫氏からこの建物を借り、弘治丙辰（九年、一四九六）に錢徳洪はここで生まれたと記している。従って、王家の人々は王華の栄達に伴いこの建物を遅くとも弘治九年までに莫氏に返却して引っ越し、その後錢氏が移り住んだことになる。

我々は路地を縫うようにして瑞雲樓へ進んだ。現在の瑞雲樓は図一にあるように龍泉山の真北に位置するので、「瑞雲樓在龍泉山北」とする『重修余姚県志』の記述、及び同書巻頭の地図の「瑞雲樓古址」の位置と符合する。王華が貧しかった時に住んでいた建物は、現在も山后新村の武勝路から少し入った市井の人々で賑わう地区にあった。それどころか、つい数年前までは居住者がいたのだが、現在はそれらの人々は退去させられ、附近の人が管理のみ行っている。現在の瑞雲樓は、敷地の北側に位置し、南向き左右対称の二階建てで、南側が庭となっている。このような形式は余姚に残る古建築の典型である。建物の保存状態は非常に良いが、目下展示準備中とのことで内部はがらんどうであった。

庭には余姚市文物管理委員会による「瑞雲樓遺址」の石碑が立てられている。そこには「該樓燬於清代乾隆年間、現存部分房屋為清代建築」とある。乾隆年間に焼失したというのは伝聞によるもの様で、文献で直接確認することはできない。現在、瑞雲樓に「古瑞雲樓」とある扁額が保存されているが、そこに光緒辛卯（十七年、一八九一）と記されていることから、遅くともその年までに再建されたことは確実であろう。

瑞雲樓の見学終了後、葉氏を交えての昼食となったが、葉氏によると、一九九六年十一月から瑞雲樓を一般公開するそうである。現在の状況では、地元の研究の方々に事前に連絡しない限り見学は難しいが、一般公開後は状況は大きく変化するかもしれない。

三、河姆渡遺跡・天一閣・延慶寺跡

昼食後、葉氏と別れ、我々は余姚の東南に位置する河姆渡遺跡へと向かった（本来は陸埠鎮にある黄宗羲墓に行くはずだったが、道路工事の関係で果たせなかったのは残念である）。河姆渡遺跡は余姚の東二十五キロ、寧波の西二十五キ

口で、両市のちょうど中間に位置する。河姆渡遺跡は一九七三年夏に発見されたが、大量の米の発見によって七千年前にこの地に稲作文化が存在したことが証明され、それまでの古代史の常識を塗り変えたことであまりにも有名である。

現在は発掘現場の隣に博物館が立てられており、我々は遺跡に関するビデオを見せられた後、館内を見学した。有名な双鳥と天体の図柄が刻まれた象牙製品の模造品も展示されていたが、先入観が有る為か、非常に小ぶりなのが意外であった。館内見学後、発掘現場へと向かった。発掘現場には発掘された場所が示されていたが、現在は発掘はなされていないようだった。発掘現場は姚江沿いであり、河姆渡の名の元になった渡し場が現在も使われていた。用いられているのはごく小さな舟ではあったが、オートバイなどまでも積んでなかなかの活躍であり、水路が重要な機能を現在でも果たしているのを見ることができた。

この後、再び寧波市内にもどり、市街地の西部に位置する天一閣を見学した。ここは明の嘉靖四十年（一五六一）に范欽によって創建された現存最古の蔵書楼である。彼は死に至るまでに七万巻の書物を収集し、その中には書家であり、天才的な偽作家でもあった豊坊の豊氏万巻楼の書も含まれていた。しかし、真に驚くべきなのは、蔵書の散逸を防ぐ為の范氏代々の努力である。敷地内に足を踏みいれると池が大きなスペースを取っているのが目を引くが、これは火災を防ぐ為のものであり、天一閣の名さえも、『易』繫辭上の鄭注に「天一生水於北」とあるのに由るほどで、いかに火を恐れたかがよく判る。閲覧も厳重に制限され、范氏一族全員の同意を必要とした。黄宗羲でさえ閲覧には特別な許可を必要としたほどである。彼が康熙癸丑（十二年、一六七三）に閲覧を許された際のことを記したのが「天一閣蔵書記」（『黄宗羲全集』十二巻、浙江古籍出版社、一九九三）である。その後、天一閣の蔵書が少しずつ散逸していった様は「中国の蔵書家たち」（清水茂、「天地」一九七九年第十、十一号。現在『中国目録学』所収、筑摩書房、一九九一）に簡潔にまとめられている。図書館の持つ保存と閲覧という二つの機能の矛盾を天一閣の歴史は物語っているとと言えるだろう。

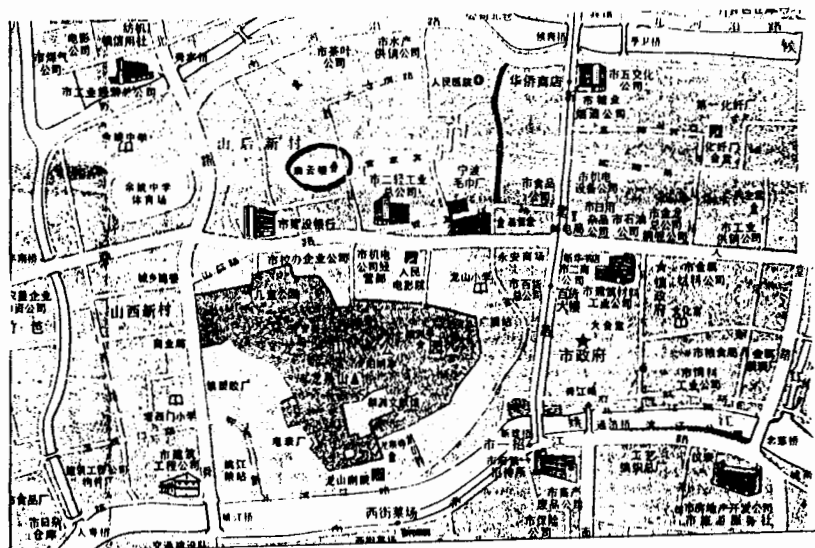
行程の最後に、我々は延慶寺の跡地に向かった。延慶寺はもと保恩院といい、五代後周の広順三年（九五三）に創建された。日本僧の寂照が源信の間目二十七条に対する答釈を請うたことで名高い（『四明尊者教行録』四）、趙宋天台山家派の四明智禮によって重建され、大中祥符三年（一〇一〇）には延慶寺と改め

られている。その後も重修が繰り返され、新しくは康熙戊申（七年、一六六八）に重建されている。また常盤大定博士が来訪された時もお存していた（『支那文化史蹟』、法藏館、一九〇〇）。しかしながら解放南路十八延慶巷の延慶寺の跡地には映画館が立ち、往時を窺わせるものは延慶巷という地名のみであった。現在中国でも市街地の再開発に伴って古い地名が消えていく傾向にあるようだが、この地名だけは残るように祈らずにはいられない。

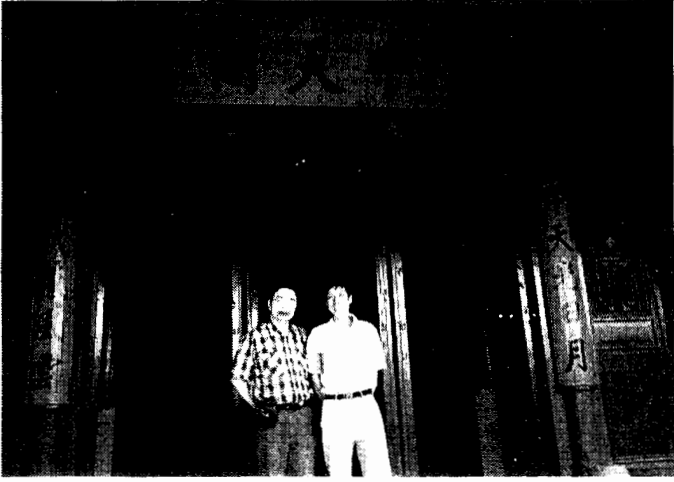
ホテルにもどった後、楠山春樹・三崎良周両本学名譽教授以下調査団のメンバーは、方祖猷寧波大学教授・付小莉同大講師の訪問を受けた。方教授は陽明学を専門とされ、目下『王畿評伝』を準備中であり、また付講師は古代思想を専門とされているとのことだった。両先生との対談の際、寧波で発行されている学術雑誌についての情報を得ることができたのは有益だった。この種の情報は、現地に来ない限り得られないものだからである。

夜九時頃、方教授等との対談を終え、我々はこの日の全日程を終えた。

※ 本稿の執筆にあたり、葉樹望・方祖猷両氏より資料面で多大の恩恵を受けた。末尾ながら感謝の意を表する次第である。



〔図一〕龍山附近図（図中、梨洲文献館とあるのが中天閣である）



【图二】中天閣



【图三】瑞雲樓